2026年5月3日 主日礼拝メッセージ

聖書:エペソ人への手紙4章25～32節

説教:隣人に真実を語る

はじめに

4章1節にはこう書かれていました。「あなたがたがは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい。」今日開いている4章の最後は、この1節の結論と言うべき所で、ふさわしい歩みとはなにか、具体的に掘り下げています。今日はこの箇所から三つ取り上げます。一つ目。そもそもどうしてふさわしい歩みをするのか。二つ目。ふさわしい歩みとはどんなものなのか。具体的な内容。三つ目。私たちは、そもそもふさわしい歩みができるのか。できるというのなら、いったいどのようにしてできるようになるのか。この三つです。

１　なぜ召された者にふさわしく歩むのか

そこでまず一つ目の疑問です。どうして私たちは召された者にふさわしい歩みをするのか。その答えは24節にあります。「真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」神に救われたとき、私たちは古い人を脱ぎ捨てて、日々新しくされ、新しい人を着る者になりました。

このことは制服というものに似ています。たとえば消防士の人たちは制服を着て、その職業にふさわしい働きをします。もちろん、新人が制服を着たからといっていきなり消防士の働きができるわけではない。消防署の前を通ると、かけ声をかけながら建物にかけたはしごを登ったり、ホースを巻いたりして訓練をしているのを見かけます。いろいろな訓練を積んで、時間をかけて消防士の制服にふさわしい働きができるようになります。それと同じように、新しい人を着た私たちも、いきなりその日からふさわしい歩みができるわけではない。日々新しくされ続けていきます。日々訓練されながら、少しずつふさわしい者と変えられていきます。

召された者がふさわしく歩むのは、私たちが新しい人と呼ばれる制服を着せられているから。その制服に合うように、制服にふさわしく歩んでいくことになります。

ここで注意していただきたいのですが、私はいま「召された者にふさわしく歩んでいく」と言いました。「召された者にふさわしく歩まなければならない」とは言いませんでした。この違いはなにか。また最後に触れたいと思います。

２　ふさわしい歩みとは

１）真実を語る

次に二つ目の疑問、ふさわしい歩みというけれど、もっと具体的にはどうすることなのか。その内容です。それは25節前半にあります。「ですから、あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。」真実と訳していることばは、真理と訳しているのと同じことばです。問題は真理とは何かです。最近は、嘘でも偽りでもとにかく大きな声で叫んだ者が正しい、真理である。そんな時代になってきました。もちろん多くの人は、嘘はいけない。きちんと真理を守るべきだと考えています。ところが、いざでは真理とは何かかということになると、考え方がばらばらで決められない。結局、人の数だけ真理があるのだと言う人さえいる始末です。

しかし私たちはこのような意見には与しません。21節にこうあります。「真理はイエスにあるのですから。」私たちは、イエスから教えてくださった真理をよりどころの基準とします。

２）隣人に対して語る

ここまではすぐに納得いただける結論でしょう。しかし、パウロはここで終わらせません。この真理を隣人に対して語りなさい、と続けています。ここには大切な意味があるように思います。たとえば、聖書をよく勉強したのでイエスの真理がよく理解できたという人がいたとします。しかし、その人がほかの人に真理を語らなかったなら、その人は実は真理をよくわかっていない。イエスの真理を知った者は、やがて隣人に語るようになっていく。イエスの真理は、一人の人を変えて終わるのではなく、隣の人との関係も変えいていく。そういうものだと言っています。

３）真理と怒りの感情

そのことの具体例として取り上げているのが、怒りの問題です。26節。「怒っても、罪を犯してはなりません。憤ったままで日が暮れるようであってはいけません。」ここだけでなく31節にも「怒り」のが出てきます。誤解のないように言っておきますが、怒ってはいけないと言っているのではありません。怒ることはあるだろう。ただ、いつまで

も怒っていたなら、それがやがて大きな罪になることがあると言っているのです。
　それはよいとして、どうしてパウロは真理を語ると言った後で、すぐに怒りのことを取り上げるのでしょう。

４）聞く人に恵みを与える
　私の体験で言うのですが、怒っているときは、ふだん言わないような激しいことばが口からポンポン飛び出してきます。頭の片隅では、こんなことばを言ってはいけないと思いながら止められない自分がいます。それでも少し時間が経ちだんだん落ち着いてくると、29節のみことばを思い出していきます。「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。むしろ、必要なときに、人の成長に役立つことばを語り、聞く人に恵みを与えなさい。」
　相手を罵るのではなく、聞く人に恵みを語る。頭ではわかります。いつもそうでありたいとも思います。しかし、かーっとなっているときはそうはいかない。隣人に対して真理を語りなさいと言われても、聞く人に恵みを与えなさいと言われても、できるときもありますが、できないときもある。そんなとき、自分はダメクリスチャンだと思って落ち込むこともあります。

３　キリストにおいて赦されているので
１）本当にできるのか？
　こうして三つ目の疑問、召された者にふさわしい歩みができるのかという問にたどり着くことになります。このことについてですが、最初のところでこう言ったのを思いだしてください。「召され者にふさわしく歩まなければならない」ではなくて、「私たちは召された者にふさわしい歩みをする」と言いました。この違いは注意してください。4章1節で、パウロは「ふさわしく歩みなさい」と強く命令しているように聞こえるので、どうしても「ふさわしく歩まなければならない」と反応してしまうのも無理はありません。
　でもイエスは 「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽い」（マタイ11章30節）と言われました。召された者にふさわしい歩みということも、努力ではなくて、水が高い所から低いところに流れるようにもっと自然に起きることではないのかと思うのです。

２）キリストにおいて赦してくださったので
　そんなことはできるのでしょうか。32節前半にもこうあります。「互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。」もしも世の人たちが優しい心で赦し合うことができたら、争いや戦争はなくなり世の中は随分変わるだろう。ほかの人のことなら素直にそう思える。ところが自分のことはどうか。優しい心で赦し合うことがいかに難しいか。怒りのあまり頭に血が上って、ひどいことばを叫んでいる自分がいたりします。
　どうしたらよいのでしょう。ヒントは32節後半にあります。「神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださったのです。」人と人が赦し合おうとするなら、まず最初に思い起こすべきことがあります。神が私たちをキリストにおいて赦してくださった、そこに立ち戻る必要がある。そこで思うことは、いったいどれほどのひどい罪が赦されていたのかです。自分の罪のどす黒さを思えば思うほど、赦しの恵みが反比例するようによくわかってきます。相手が全部悪いのだと怒りをぶつけていたけれど、そう言う自分はどうだったのか。神の前に正しい人間だったのか。相手を責める前に自分こそが赦されなければならない罪人であった。そのことを振り返ることになります。そうしたら気がつきます。とても他人を責める資格がない。そのことに気がついたとき、あなたは真理を隣人に対して語る者に変えられていく。水が流れるように自然にそれが行われます。十字架のキリストがそうしてくださるのです。

３）互いにからだの一部分となる
　最後になりますが、もしも互いに赦し合うことができたなら何が起こるか。そのことを確認しておきます。25節後半にこうあります。「私たちは互いに、からだの一部分なのです。」からだとはキリストのからだのことです。私たちはひとりひとりがばらばらに信仰を守るのではありません。キリストの真理を教えられていくとき、互いに赦し合うことができるようになり、互いに結び合わされていきます。キリストの真理はたんなることばのことでは終わりません。現実に目に見える者として人を変えて赦し合い、結び合わされていく。世の人たちは、このような教会の姿からキリストの真理を見ることになります。そのような力ある真理のみことばを与えてくださった主の御名をあがめます。